

目次

はじめに	1
構成・本書の使い方	2
カリキュラム	3
振り返りシート	4
基本コース	
第1回	5
第2回	6
第3回	7
第4回	8
第5回	9
第6回	10
第7回	11
第8回	12
第9回	13
第10回	14
第11回	15
第12回	16
第13回	17
第14回	18
第15回	19
プログラムコーディネーターコース	
第1回	20
第2回	21
第3回	22
第4回（合同）	23
システムコーディネーターコース	
第1回	24
第2回	25
第3回	26
教室活動事例	
教室活動事例Ⅰ	27
教室活動事例Ⅱ	28
事業評価	29
授業報告書例	31

奈良教育大学 持続発展・文化遺産教育研究センター 特任准教授 藤田美佳

本書は、多文化共生を目指す地域で日本語教育支援事業に携わる受講者が、当該活動地域において、地域社会や地域住民が直面する様々な課題を自ら意欲的に解決する活動の一環として日本語教育を行い、「コーディネーター」として事業を企画運営する起業家となることを目標としている(p.1)。

地域日本語教育事業に携わる多くの方々にとって、「地域日本語教育「起業家」」とは、耳慣れない言い回しであろう。本事業で目指されているのは、直面する課題解決のための、実践的なプログラムの立案や展開にとどまらない、地域の潜在的な課題を住民間で意識化し、外国人・日本人という二項対立的な「支援-被支援」という枠を超えた、地域住民として課題を共有化すること、この意識化と共有かを通じて、多様な背景をもつ誰もが住み良い地域づくり事業に取り組むことを目指したものと考えられる。一般的に、「起業家(アントレプレナー)」は、起業・創業精神(アントレプレナリシップ)に富み、独創的な発想を事業化して行くが、ここでいう「地域日本語教育「起業家」」に求められるのは、単純な新規事業の立ち上げではなく、地域住民・企業・行政等の個々が「点」として取り組み、「線」として繋がって来た事業を、いかに多「面」的に繋いで行くか、いわば、繋ぎ方の独創性が求められるものである。また、起業は、事業を起こすとともに、継続(存続)させて行くことが同時に求められる。

これらの観点を踏まえ、受講生達が立ち上げた「命を守る日本語教室」を事例に、起業家育成についてコメントする。筆者は、同教室を見学させていただいたが、立案、運営と講座の全回を見学し、質的調査を実施したわけではないため、限定的な評価となることを予めお断りしておく。

2013年3月11日 命を守る日本語教室 HUG 避難所運営ゲーム

- ・【講義内容の設定】地形を含めた地域の文脈、時代の要請(時期)を含め、非常に興味深いピックを取り扱っており、重要な取り組みである。
- ・【参加者】家族で参加している世帯が多いことが特徴として確認できる。テーマに即した学習を深める上で、家族での参加は有効であると思われる。
- ・【講師】日本人指導者2名と日系人指導者1名の組み合わせによって構成されており、通訳と指導とを複数言語で行えるため、受講者にとって、理解しやすかったと考えられる。また、消防士の方の参加、地域の自治会の方の参加があり、テーマに即した参加者、支援者が得られたことが、講座の運営を充実させていると思う。とりわけ、自治会関係者の参加が、今後、講座修了後の発展的な学習につながる契機となったようで、これまでの行事では、日本人が設定した行事に日系人や外国人が参加するという形式から、日系人の学習会を地域の人々に拓くような発展的な学習になっていたことが特徴であり、ユニークな取り組みになっていくと思う。
- ・【ルビ振り】配布資料として、「前回の復習」がルビ振り、ポルトガル語訳が用意されており、「ふりかえり」学習を参加者で共有しながら、学習内容の定着を図ること、また帰宅後も自律的な学習を行いながら、確認することが可能である。しかしながら、本日のピックの内容についての板書は、漢字での掲示物が用意されており、後からひらがなでルビ振りをしていたが、口頭で聞き取りにくい発音を何度も確認するやり取りを避け、時間の節約に繋げることや、ひらがなで確認することで、共に参加していた子ども達にも確認できること等を考慮し、あらかじめルビ振りの掲示物を用意するのがベターだと思う。
- ・【時間配分】子どもの参加も多いので、適宜休憩時間を工夫して設けるべきだと思う。大人にとっても休憩を設けながら行った方が、メリハリがつくと思う。
- ・【今後の展開に向けて】

「前回の復習」として配られていたプリントを、家族で共有しながら復習して行けるような形態にする工夫があってもいいのではないかと。クイズ形式でも構わないが、穴埋め式など、書きやすい方法であること、そして今後、地域住民の日本人と共同で学習するツールにも活用できるとなおいののではないかと。

地域住民との共同学習にすることによって、日本語の会話、読み書きの機会も増えるであろう。生活課題を通じた日本語四技能習得の機会として発展させていくことを目指して欲しい。

- 起業した事業である「命を守る日本語教室」を自治体(静岡県および浜松市)が取り組む防災事業と、企業内でも実践されている防災教育(研修)とをいかにつないで行くのか。当該地域においては、永年の防災教育の取り組みが、自治会や学校なども含め多面的に展開されているものである。個々の取り組み「点」を包括的に「面」としての取り組みへと昇華させて行くことと、事業の継続を通じて、受講者が、起業家から事業家として活躍することを期待している。
- 「命を守る日本語教室」は、これまで外国人住民が、日本人支援者が用意した事業に招かれる形態での多文化共生活動が多くを占めていた傾向を打破る(ブレイク・スルー)点においても特徴を有している。また外国人自身が立ち上げる地域活動は、外国人自助組織の性格を持つものも少なくないが、外国人に限らない地域自助組織として、浜松が長期的にかつ、多領域で取り組んで来た防災教育を核に、新たな事業の展開と継続を望みたい。

日本語教室 授業報告書(例)

授業報告書						
タイトル						
授業日時			講師名			
使用教材			出席者		遅刻者	
			欠席者			
学習目標						
学習目標 達成度	1…25%以下 2…50%以下 3…75%以下 4…90%以上 1 2 3 4					
授 業 内 容				備 考		
所 感						
気付いた課題						
改善策・対応策						

教室活動事例Ⅱ

教室名：外国人研修生のための日本語教室

担当：システムコーディネーター 1名（日本人）、プログラムコーディネーター 1名（日本人）

目標：日常生活に必要な言葉と漢字を学び、日本文化も体験しながら、日本人との交流を深める

対象：浜松市内の企業で働く外国人研修生

協力：カワイ土産店、アイムジャパン、(株)坂下製作所、遠州鉄道(株)、グローバル人材サポート浜松

内容：

回数	開講日時	時間数	場所	参加人数	国籍	取組のテーマ	授業概要
1	平成25年 2月10日 14:00～ 16:00	2時間	静岡県 西部交 流プラ ザパ レット	1人	インドネ シア(1人)	自己紹介(日本 人と友だちにな ろう！節分を知 ろう！)/節分・ 折り紙	研修生の国の文化と日本の文 化の違いを比較しながら自分の 国の紹介ができる。 日本人に興味を持ってもらえる ような自己紹介ができる。
2	平成25年 2月24日 14:00～ 16:00	2時間	静岡県 西部交 流プラ ザパ レット	6人	インドネ シア(2人)、タ イ(2人)、ベ トナム(2 人)	自己紹介/丁寧 な会話・友だち 同士の会話/日 本の歌(ふるさ と・朧月夜)	丁寧な会話、友だち同士(普通) の会話の違いがわかり、使い分 けることができるようになる。 人間関係のきっかけをつくる挨拶 ややり取りができるようになる。
3	平成25年 3月3日 13:00～ 16:00	3時間	静岡県 西部交 流プラ ザパ レット・ 松韻亭	8人	インドネ シア(2人)、タ イ(5人)、ベ トナム(1 人)	友だちを誘って みよう！/お茶 会に参加(煎 茶)	友だちを誘って、一緒に何かを する約束をすることができる。相 手が都合がつかなかった時の 対応、また次の約束を提案して みる時の会話について。
4	平成25年 3月10日 14:00～ 16:00	2時間	グロー バル人 財サ ポート 浜松	7人	インドネ シア(2人)、タ イ(5人)	バスで出かけ よう！(座学編) /書道(色紙作 り-好きな漢字 一文字))	大勢の人と行動を共にする時に 使う言葉。指示をしたり、指示を 理解して行動することができる。 状況に応じて質問等をするこ とによって他の人と円滑なコミュニ ケーションをとる。目的地までの 道順を説明し友人を誘導するこ とができるようになる。
5	平成25年 3月17日 13:00～ 16:00	3時間	グロー バル人 財サ ポート 浜松・ 竜ヶ岩 洞	20人	ベトナム(4 人)、インド ネシア(2 人)、タイ (14人)	バスで出かけ よう！(実践編)	前の週までに勉強した言葉を実 際に使って、日本人、自分の国 以外の人たちとコミュニケーション を取り、友だちになる。

効果：本教室では、コーディネーターが常にPDCAサイクルで事業運営を行っていたことがよかった。当初の参加者が1人という厳しい状態から広報活動の見直し改善を図り見事口コミで受講者を集めた。また企業に対する交渉により、広報やニーズ調査、バス貸借の費用軽減など様々な面で企業協力を得ることができていた。実際に研修生からヒアリングをして、学習ニーズを把握して臨機応変に内容変更を行うなどしていた。また、大学生ボランティアの参加も促し、彼らが研修生との年齢が近いということもあり、教室活動のなかでバス旅行や文化体験を大学生と研修生が話しあいながら決めるよう協働していたことで、双方の理解と交流が深まり、良好な人間関係を構築することができていた。



教室活動事例Ⅰ

教室名：命を守る日本語教室

担当：システムコーディネーター 1名（ブラジル人）、プログラムコーディネーター 2名（日本人）

目標：災害緊急時の日本語を正しく理解し、適切な行動が取れるようにする

対象：浜松市南区在住の外国人

協力：浜松市立五島公民館、白脇消防署、自治会、保護司、防災士、遠州浜地区日本人住民

内容：

回数	開講日時	時間数	場所	参加人数	国籍	取組のテーマ	授業概要
1	平成25年 2月12日 19:00～ 21:00	2時間	五島公 民館	13人	ブラジル、 ペルー	災害が起きる 前に／基本的な知識と言 葉の紹介	津波が起きる理由及び事前 準備について
2	平成25年 2月19日 19:00～ 21:00	2時間	五島公 民館	12人	ブラジル、 ペルー	東海地震、避 難サイレン、 屋内避難方 法	防災についてのDVDを鑑賞 後、震災直後の行動を学 習。最後に防災士による質 問応答。
3	平成25年 2月26日 19:00～ 21:00	2時間	五島公 民館	9人	ブラジル	屋外での安全 確保、避難方 法や適切な行 動を学習	速報ニュースの漢字、避難 時の優しい日本語を学習し、 時間帯による家族の避難方 法について学ぶ
4	平成25年 3月5日 19:00～ 21:00	2時間	五島公 民館	11人	ブラジル	災害が起きた 後に安全確保・避難・救 出・救護の時 に必要な言葉	災害時の応急手当の必要性 を学んだあと、消防士と急救 命士によるAEDや心肺蘇 生、人口呼吸の方法を学 習。119番ロールプレイ。
5	平成25年 3月12日 19:00～ 21:00	2時間	五島公 民館	14人	ブラジル、日 本	避難所での生 活に関する知 識、必要にな る言葉、会話	強い地震直後の高台への避 難方法。避難場所の再確 認。避難所運営ゲーム (HUG)による避難所の運営 を日本人と共に体験。防災 士による質問応答。
6	平成25年 3月19日 19:00～ 21:00	2時間	五島公 民館	12人	ブラジル、 日本	新しい津波警 報速報によく 使われる漢 字。大切な言 葉の振り返り	テレビ画面の緊急速報に出 てくる漢字を学習。総合的な 復習。お別れ会。

効果：外国人と日本人が共に災害時の課題を共有することができた。自治会が積極的に協力し、継続開催の場合、自治会所有の公民館を無償提供してくれることになった。地元消防署の消防士・救命士が外国人と接触することにより、「やさしい日本語」でのコミュニケーションをとることができるようになった。



第3回	
テーマ	チラシの作成
目標設定	広報活動ができるようになる

内容のポイント
・誰もが内容を理解し、参加したくなる意識を促す広報媒体は何かがわかるようになる ・チラシは見やすく、簡潔に作ることが大切であることを理解することができるようにする ・広報活動において、チラシ配布に効率的な場所や時間を地域の状況を踏まえて考えられるようにする

受講者の気づき(例)
・チラシ作成にはPC技術が必要 ・何ができるようになるのか、明確に記載することが大切 ・外国人の集まるところを見るなど、市内の状況を知らないのでは、そこから始めなければならない

事業運営ポイント
・チラシ作成にはPC技術のレベル差も問題となる。手書き作成でもいいことを促していく ・チラシの配布活動を積極的に行えるよう助言をする ・対象となる外国人を知るためにはフィールドワークが大切であるが、苦勞を伴うため励ますこと ・チラシ印刷の費用は事業主催者が負担すること ・受講者が集まりづらいチラシであっても、すぐに校正するのではなく、それに気付くよう導くこと ・チラシ作成は早い時期から始められるよう、この講座は基礎コースに組み入れてもいい

第2回	
テーマ	収支予算計画を立てる
目標設定	経営者として収入と支出のバランスを考え予算を立てられるようにし、継続的な事業運営が可能となるようにする

内容のポイント
・目標とする状況をイメージできるようにする ・収支計画書の基本的な考え方を学ぶ

受講者の気づき(例)
・受益者負担という考え方を知った ・外国人が日本語教室の参加料は無料だと思っているので、その意識を払しょくさせたい ・サービスを保障するためにも受講料は負担してもらわなければならない ・収益をあげることは難しいと思った

事業運営ポイント
・講師には、事前に受講者の状況と目標、意識について伝えておく ・この回で、予算書ができるようになるところまでではなく、基本的な考え方を学べるようにする ・収支予算について考えることができるよう、意識をつけるところがポイント ・講師には、NPOや行政関係の経理等に詳しい税理士や会計士に依頼するといい

第1回	
テーマ	教室設置を考える
目標設定	外国人のニーズを捉え、教室設置ができるようになる

内容のポイント
・いつ、どこで、だれのための教室を設置するのかを考えることができるようにする ・日本語教室は何のための教室なのかを考えることができるようにする ・地域の日本語教室は学校ではなく、地域を活性化させる人の集まる場であると理解することができるようにする ・事業化していくために教室を設置するうえで大切なニーズ把握と課題意識を高められるようにする

受講者の気づき(例)
・駒ヶ根市の日本語教室は外国人の生の声から改善されてきたこと ・プロなのか、アマチュアなのかが問題なのではない ・その教室をするべきという思いとやりたいと思う気持ちと一緒にしないと動かない

事業運営ポイント
・講師は、地域日本語教育はプロでなければ担えないという考えの人ではない方に依頼する ・講師は行政による日本語教室の担当者、地域のNPOで教室設置を行ってきている人がいい ・講師が多文化共生マネージャーコース修了者で実践者だと、より説得力のある講義となる ・講師に迎える人の地域の状況と自分の地域の状況をきちんと比較し、情報共有しておくこと ・講師には受講者の背景とこれから教室設置を行う人たちだということをきちんと伝えておく ・受講者は教室設置前で不安感を募らせていることから、その不安感を軽減できるようにする

第4回	
テーマ	事業計画と目標・評価～成果が出る事業計画とは～
目標設定	日本語教育という事業を社会の課題を解決させる事業とし、その事業をどのように計画遂行していくと社会還元されるのかを考え、行動できるようになる

内容のポイント
・事業は「社会課題の解決」のために行われることを理解し、自らの活動を考えることができるようになる ・計画を立てる際、協働する仲間とのコンセンサスを丁寧にとることが大切である ・中期目標も考えることが大切であることがわかる ・他者に伝わりやすい明確な目標を文字化すること ・事業に関わる人も、それぞれの目標を掲げられるようにすることが重要であることに気付ける ・評価方法を細分化することができるようになる

受講者の気づき(例)
・ぼんさいアプローチ ・考え方 ・事業目標は「状態の変化」である ・日本語教育という手段でどうやって課題を解決させるか

事業運営ポイント
・講師は、NPOやNGO等で事業運営を5年以上行っている人であること ・講師には、事前に受講者の状況や状態を細かく伝え、落としどころをどこに持っていくのか、その方向性をきちんと明確にしておくこと ・講師は、NPO設立や団体支援を行っている中間組織支援経験者がいい

第3回	
テーマ	日本語能力の評価
目標設定	PDCAサイクルのC(評価)で「生活者としての外国人」の日本語能力の測定・評価に関する報告書を参考に、教室(事業)を様々な視点から評価できるようになる

内容のポイント
・評価とは何かを押さえること ・評価の種類、時期を学ぶ ・「生活者としての外国人」に対する日本語教育における日本語能力評価をもとに日本語学習ポートフォリオについて学ぶ ・ワークショップを通して、活動目的を掲げ、その活動を成立するロールプレイタスクを作ることができるようにする

受講者の気づき(例)
・評価のことを初めて学んだ ・これまでは支援者(指導者)が学習者を評価することばかりを考えてしまっていた ・評価には3つの時期と3つの種類があることがわかった ・PDCAサイクルのCのときに、これを使えばいい ・自分には、相手进行评估する能力があるとはまだ思えない

事業運営ポイント
・講師には、評価の専門家を迎え、教室活動の評価を客観的に行えるように導いてもらう ・プログラムコーディネーターはいわば教務主任のような立場なので講師評価もできるように心構えを必ず学べるようにする ・とよた日本語学習支援システムなどの評価の先進地域の取組に関する情報入手もしておく ・システムコーディネーターも参加できるのであれば、事業評価の視点で参加を促してみる ・「生活者としての外国人」に対する日本語教育における日本語能力評価についてを事前入手し該当ページをコピーするなど、受講者にもわかるようにするとい ・講師には事前に受講者の活動状況や背景を伝えておき、どう導いてほしいのかなど、ゴールを明確かつ具体的に示せるよう、よく話し合いをしておくこと

第2回	
テーマ	教材分析・教材を作る
目標設定	教室活動をいかにリアルに楽しくわかりやすくするか、教材を分析し、外国人が社会的自立を果たすための効果的な日本語学習指導が考えられる

内容のポイント
・数あるテキスト教材の使用の目的と指導方法について、理解することができるようにする ・教室活動の目的を十分に理解し、効果的な学習指導ができるようにする ・教材を作ることが目的なのではなく、いかに教材を工夫して活用するかを考えられるようにする ・教案と教材を作成する過程、教室での実践、実践後の時系列で内容を捉えられるようにする ・テキストの奥にあるものを見出し、活用できるようにする

受講者の気づき(例)
・テキストのシラバスを見ることが大切なことがわかった ・テキスト(教材)ありきではなく、何ができるようにしたいのか、しなければならないのかを考える ・教材は、それを使って何ができるようになるのかの道具の一つ

事業運営ポイント
・講師は、リアルな教室活動を行うことができる人で、テキスト著者が好ましい ・様々なシラバス(場面、機能、構造など)のテキストを用意し、提示できるようにしておくこと ・Can Do Statementで日本語教育を捉えられるように導いていくことを講師とよく打合せすること ・教材づくりにおいてPC操作が苦手な受講者もある。そのあたりのフォローアップをできるようにする ・手づくり教材の見本なども置いておくといい

第1回	
テーマ	教案を作る～何ができるようになるのか～
目標設定	教室に参加する事で何ができるようになるのかを明確にすることが重要であること、かつそのためにどのような教案を作り活動していくのかを理解することができる

内容のポイント
・Can Do Statementの基本を理解することができる ・何ができるようになるのかを明確に提示することで外国人の学習意欲を促す ・教案はシナリオで、学習者の状況等で予定していた通りに授業は成立しないことを知らせる ・多文化共生社会に資する教室活動は何かを常に考えられるようにする ・外国人学習者は、何を求め何ができるようになるのがいいのかを常に意識することが大切であること ・意味のある活動は何か、外国人が生活のなかで得た言葉をいかに引き出すかを考えることができる

受講者の気づき(例)
・教室活動は想像したとおりに全てうまくいくのではなく、受講者の状況によって左右される ・教室に参加することで何ができるようになるのかを提示することの重要さがわかった

事業運営ポイント
・講師は、リアルな教室活動を行うことができる人がいい ・講師は場面をリアルに再現し、その場面の中で具体的な日本語会話事例が提示できる人 ・Can Do Statementで日本語教育を捉えられるように導いていくこと ・教案の思い通りに進まなくても、受講者を第一に考えて取捨選択ができるようにする ・外国人学習者のポテンシャルを引き出す、会話を促す活動ができるように導くこと

基本コース

第15回	
テーマ	先輩社会起業家に学べ！今こそ社会の課題を解決しよう
目標設定	先輩社会起業家から経験談を直接聞き、はじめの一步を踏み出すことができる

内容のポイント
・先輩起業家から、実践上の苦勞、活動を継続する意義を生ので伝える ・先輩社会起業家は社会の課題を解決するために活動しているのだということを学ぶ ・非営利か営利かを考えるのではなく、その活動をしやすくするための方法を選択できるようにする

受講者の気づき(例)
・行政に頼ることばかりではダメだということがわかった ・自分の町の課題をもう一度見直してみる必要がある

事業運営ポイント
・講師はNPOやNGO等で事業運営を行っている人で、必ずしも多文化共生に特化していなくてもよい ・講師には、事前に受講者の状況や状態を細かく伝え、講師自身の活動のきっかけや今に至る苦勞などを具体的にわかりやすく話してもらえよう念入りに打合せをしておくこと ・講師に伝手がなかった場合、市民協働を行っている団体等を市役所から紹介してもらうといい

基本コース

第14回	
テーマ	プレゼンテーションをしてみよう
目標設定	誰にでも意図が伝わるプレゼンテーションができるようになる

内容のポイント
・委託事業や助成金の申請で欠かせないプレゼンテーション力を身につける ・事業の目的が明確で万人に理解してもらえる表現ができているかどうかを客観的にみることができるようになる

受講者の気づき(例)
・情報をいかに伝えやすくするか工夫すること ・多様な情報提供力が必要

事業運営ポイント
・講師は、組織の広報をしている人や助成金等を獲得している人がいい ・講師には、事前に受講者の状況や状態を細かく伝え、落としどころをどこに持っていくのか、その方向性をきちんと明確にしておくこと

基本コース

第13回	
テーマ	ファシリテーションを学ぶ
目標設定	ファシリテーションのポイントをおさえ、集団における意思決定ができるようにする

内容のポイント
・ファシリテーション／ファシリテーターに関する基本的な知識と技術を習得することができる ・コンセンサス(同意)実習を通して、集団における意思決定のあり方を学ぶ

受講者の気づき(例)
・ワークショップを通して、意見の出し方、意見の理由を他者に伝えることの大切さがわかった ・ワークショップを通して、話し合いは面倒くさがらず丁寧に行わなければならない

事業運営ポイント
・講師には、組織を動かしている責任者や企業や地域をファシリテートしている実践者が望ましい ・地域日本語教育の多くが集団によって行われているものであることから、集団組織の意思伝達、意思決定の必要性を正しく理解してもらうことが大切 ・集団の活動目的が、その集団を構成している人たち全員に共有していることを確かめる手段としてもファシリテートを活用し、方向性を正していくことが必要であることを、受講者に理解させる ・講師には、受講者の背景を詳細に伝えておくこと

基本コース

第12回

テーマ	地域を巻き込む活動を考えよう
目標設定	多様な人や機関との連携・協働を促進する力をつける

内容のポイント

- ・社会を構成している人や機関がそもそも多様であることを理解することができる
- ・連携と協働の意義を学ぶ
- ・活動が個人的なものやある特定の人たちだけで行われる閉鎖的なものにさせないことを学ぶ

受講者の気づき(例)

- ・ワークショップを通して、意見の出し方、意見の理由を他者に伝えることの大切さがわかった
- ・ワークショップを通して、話し合いは面倒くさがらず丁寧に行わなければならない

事業運営ポイント

- ・進行役とゲストと複数の講師によるディスカッション形式がのぞましい
- ・ゲストには、日本語教育に囚われず、他の分野において活動している人でもいい
- ・進行役には、ゲストの話や背景を引き出してくれる人に依頼する
- ・ゲストは必ず実践者であること
- ・ゲストの男女比、年代別、活動種別を考慮して、内容のバランスをとること

基本コース

第11回	
テーマ	ボランティアマネジメント論
目標設定	ボランティアと人材マネジメントの基礎知識を習得する

内容のポイント
・地域日本語教育の担い手の多くがボランティアであることから、ボランティアという語源の意味を正しく理解し、社会課題に対する主要な担い手として「ボランティア」がある社会観を押さえる ・組織編成において必要となる人材マネジメントの手順を体感し、理解できるようにする ・いろんな人が関わる仕組みづくりを理解し、行動することができるように促す

受講者の気づき(例)
・ボランティアの本来の意味がわかった ・ロードマップをはっきり明示することが大切である

事業運営ポイント
・講師には組織マネジメントやNPO活動に関するアドバイスを行っている人がのぞましい ・この回の目的は「ボランティア」に対する偏見と先入観の払しょくも含んでいる ・講師には事前に受講者の活動状況や背景を伝えておき、どう導いてほしいのかなど、ゴールを明確かつ具体的に示せるよう、よく話し合いをしておくこと

基本コース

第10回	
テーマ	異文化理解
目標設定	異文化であることを体感し、相手の文化を尊重し共感することを学ぶ

内容のポイント
・在住外国人が抱えているであろう課題や悩みについて、支援者の先入観を排除し、多面的に理解できるようにする ・異文化体験を擬似的に経験するワークショップを通して、異文化環境におかれた当事者の視点から考えられるようにする ・プログラムコーディネーターのコースとの接続性を意識し、コースデザインの際には、支援者自身の考えだけでなく、多様な観点からデザインを考える必要があることを理解できるようにする

受講者の気づき(例)
・ワークショップで、自分がいかに先入観を持っているかがわかった ・異文化体験できて、外国人の方の気持ちが少し理解できるようになった

事業運営ポイント
・講師には、日本人・外国人どちらでも構わない ・異文化体験できるワークショップを加えること ・講師には事前に受講者の活動状況や背景を伝えておき、どう導いてほしいのかなど、ゴールを明確かつ具体的に示せるよう、よく話し合いをしておくこと ・この回は、コースの中でどこでも配置することができる

基本コース

第9回	
テーマ	社会リソース・地域リソースを考える
目標設定	日本語教室に多様な人や機関が入るための周囲にあるリソースを把握すること

内容のポイント
・日本語教室が社会に拓かれる方法として、様々な人が協働する仕組みづくりであることを学ぶ ・その仕組みづくりのために、どのような人に連携してもらえるのかを考えることができる ・システムコーディネーターの基本である「つなぐ」とプログラムコーディネーターの「つなぐ」ことの違いが理解できるようにする

受講者の気づき(例)
・日本語教室には、いろいろな人に協力してもらうことが大切 ・日本語教室に協力してもらうための声かけの方法がまだわからない

事業運営ポイント
・講師には、該当地域の状況をよく把握している人に依頼するとい ・この回では、人や機関を「つなぐ」ことを学べるようにする ・講師には事前に受講者の活動状況や背景を伝えておき、どう導いてほしいのかなど、ゴールを明確かつ具体的に示せるよう、よく話し合いをしておくこと

基本コース

第8回	
テーマ	ニーズ分析・課題分析
目標設定	地域と学習者の多様性から多様なニーズを捉え、反映できる教室を運営できるコースデザインを考えられる。

内容のポイント
・地域のニーズ、学習者のニーズとは何かを学ぶ ・ニーズ把握のための調査方法や分析についてワークショップを通して学ぶ ・コースデザインの基礎的知識を得て、ワークショップを通して組み立てる ・ニーズ分析の結果をもとに、日本語教室の目的と目標を明確にしたコースデザインができるようになる

受講者の気づき(例)
・日本語教室のニーズ把握が甘かった ・ワークショップを通して、調査方法を細かく理解することができた

事業運営ポイント
・地域日本語教室では、とかく支援者の推測によるニーズ把握が多いため、ニーズ把握のための調査方法とその目的をきちんと理解できることが肝心 ・講師には事前に受講者の活動状況や背景を伝えておき、どう導いてほしいのかなど、ゴールを明確かつ具体的に示せるよう、よく話し合いをしておくこと ・この回は今後の教室運営に重要な内容であることから、専門的知識を有している人に講師を依頼すること

基本コース

第7回	
テーマ	教室の目標と意義・企画立案
目標設定	日本語教室の本来の目標とその目標・目的を達成するために事業として企画立案できる力を養う

内容のポイント
・各国の言語施策を比較して俯瞰的にみる ・従来の日本語教育と地域日本語学習支援と比較し、対象者の違いを明確にする ・新しい日本語教室を立ち上げるうえで、必要な外国人の背景と「何のため」の日本語教育かをワークショップを通して、学んでいけるようにする

受講者の気づき(例)
・地域の日本語教育の目的がわかった ・プロかアマチュアか、ボランティアか仕事かの違いを文字化して考えることができた ・ヨーロッパ諸国と比べて、日本の言語施策は国の施策になっていないと思った

事業運営ポイント
・地域日本語教室では、とにかく支援者の「教えたい」「助けたい」という思いから始まっている - しかし、そもそも地域日本語教育は社会の課題解決のツールとしてある理解を促せるようにする ・講師には事前に受講者の活動状況や背景を伝えておき、どう導いてほしいのかなど、ゴールを明確かつ具体的に示せるよう、よく話し合いをしておくこと ・この回は今後の教室運営に重要な内容であることから、専門的知識を有している人や実際に教室運営をしている人に講師を依頼すること

基本コース

第6回	
テーマ	外国人の声を聞く
目標設定	在住外国人自身が語る内容から外国人の心情や背景を理解し、活動に活かす

内容のポイント
・子どもの教育について、母親と子どものそれぞれの視点から考えられるようにする ・外国人当事者の声を直接聞く好機とする

受講者の気づき(例)
・進学を希望する学生へ様々な側面からのサポートをすることは何か変わるきっかけになる ・厳しい高校受験を乗り越えられた理由 ・家族の支えの大切さ ・教育支援者として生徒とどう関わっていくべきなのか、どんな教室を開くべきかを考えた ・日本語を母語としない子どもたちへの教育システムがあるといい ・親の姿勢で子どもの未来が変わる ・人生の方向を決めて行く時、勉強に取り組む時にそれを共に受け止め話を聞きサポートしてくれる人の出会いの大切さ ・本人がしっかり希望をもっていること

事業運営ポイント
・地域で活躍している外国人を複数人数ゲストに招く ・自助努力と互助活動をしている人がのぞましい ・講師には事前に受講者の活動状況や背景を伝えておき、何を受講者に語ってほしいのかなど、十分な打合せを対面式で行っておくこと ・この回は個人の生き方が赤裸々に語られる内容であることから、ゲストの心情には十分に配慮すること ・ゲストの紹介や質問の受け答えでゲストに不安感や不快感を与えぬようコントロールすること ・受講者からの質問がゲストにとって難しい内容であった場合、言い換え表現をしてフォローする

基本コース

第5回	
テーマ	コーディネーターの役割
目標設定	コーディネーターの役割を正しく理解し、PDCAサイクルで事業を捉えることができるようになる

内容のポイント
・コーディネーターの事例紹介を通して、多様な人や機関をつなぐ役割を担うことを理解できるようにする ・ワークショップを通して、コーディネーターとして取り組む課題の優先順位や手順を考えられるようにする ・一人で不可能なことは、誰と共に組むのがいいのかを考えられるように導いていく ・事業をP(計画)D(実践)C(評価)A(改善)で捉え、行動していけるように指導する ・教室の授業もPDCAサイクルで考え、振り返りと改善をきちんと行えるようにする

受講者の気づき(例)
・コーディネーターの仕事について体験を通して触れることができた ・PDCAサイクルを始めて知りました ・実施後の振り返りと改善の必要性がわかった ・地域の課題把握がなかなか困難ではないかと思う ・コーディネーターは教室開設以外でもできる ・コーディネーターは難しそうだが、実際に考えてみると奥が深く面白い ・みんなで話し合いながら企画、形を作っていく楽しさを感じることができた

事業運営ポイント
・事業を組み立てる際にコーディネーターがすべき役割と手順をワークショップ型で学ぶようにすると、理解が深まる ・講師には事前に受講者の活動状況や背景を伝えておき、どう導いてほしいのかなど、ゴールを明確かつ具体的に示せるよう、よく話し合いをしておくこと ・講師は、実際に事業運営者として活躍している人やコーディネーターの経験が豊かな人にする

基本コース

第4回	
テーマ	行政・企業・市民の取り組み
目標設定	行政と企業がどのような目的で事業を展開しているのかを理解する

内容のポイント
・行政と企業のそれぞれの立場から、外国人の日本語教育施策の関わり方を紹介する ・行政は地域日本語教育の推進に関わる予算をもっていることから、市町の方針を説明する ・企業のCSR活動の目的や支援におけるポイントを学び、活動に活かすことができるようにする ・行政と企業の取り組みから、市民である自分がどのように関わっていくのかを知ることができる ・受講者が自分は市民であり、何ができるかを考えられるように導く

受講者の気づき(例)
・浜松市の取り組みがこんなに多岐にわたっているなんて、初めて知った ・浜松市以外の取り組みについても興味がわいた ・企業の社会貢献活動について初めて知った ・助成金や補助金を得る方法があることを知ることができた ・理由や目的が明確で、それが社会の課題を解決させることであれば企業が支援してくれる

事業運営ポイント
・行政担当者は、外国人施策を行っている人を、企業の方はCSR活動を推進している人を、講師として依頼すること

基本コース

第3回	
テーマ	地域の現状分析～見つめてみよう自分のまち～
目標設定	受講者が自身の自治体の取り組みを把握し、課題を見出すこと

内容のポイント
・2週間以上前に(例えば、本講座なら第1回の時点で)、自身の自治体の状況を把握させる宿題を提示しておくこと ・受講者が客観的に自分の自治体を分析することが大切であることに気付けるようにする ・複数の自治体情報が得られる場合は、自治体の比較をするといいい ・人口変動を具体的に数値で把握し、状況を理解できるようにする

受講者の気づき(例)
・数字で表すことによって動きがわかった ・情報入手の方法がよくわからなかった ・どこで自分の自治体の情報が得られるのか、市のホームページからだけではわかりにくかった

事業運営ポイント
・自分の住んでいる自治体を数値で知ることにより、状況が具体的に把握できるようにする ・講師には、社会の課題に取り組む起業家を迎え、受講者が自治体(自分の町)の課題を数字で理解することができるように指導してもらうよう依頼する ・感情論や憶測ではなく、数字でリアルに把握させられるよう、事前宿題を課すこと ・情報の入手方法やどこにアクセスするとわかるのかをアドバイスできるようにしておく ・宿題に出すのは、人口(年齢別・外国人と日本人別)と外国人に対する行政施策、外国人支援をしているNPOやNGO等の活動状況の把握。表に表せるようにすること

基本コース

第2回	
テーマ	移動する外国人
目標設定	移民について理解を深める

内容のポイント
・グローバルな視点で人の移動について学ぶ ・日本に外国人が移住する理由・目的と受け入れる側の理由・目的を知る ・日本が外国人移民の受け入れに十分な体制が整っていないことを知る ・移民について正しく理解できるようにする

受講者の気づき(例)
・外国人の結婚事情、戸籍やお金のため ・フィリピンなどで看護師の資格を取っても日本で相互認証することもないが、一方で世界の需要に合わせて看護師の資格を取るギャップ ・今後看護師や介護士の受け入れ制度は変わるのだろうか ・多文化共生の必要性 ・女性労働力の必要性 ・高齢化社会を支えるために何ができるか ・グローバルな規模で人の異動が不可欠ななか、法律や国の姿勢を変えていく必要性を感じた ・日本は多文化共生社会として先進していけるのか？一部の国策のみで止まりはしないか ・人の移動によって様々な問題があることを知りました

事業運営ポイント
・講師は、移民問題、外国人労働者の状況に明るい専門家であること ・講師には、該当地域の人口変動、労働環境、行政施策について事前に伝えておくこと ・受講者が世界規模で人の移動について学ぶことができるように導いていくこと

基本コース

第1回	
テーマ	日本概論
目標設定	外国人受け入れに関する政府の取り組みを他国の取り組みと比較し、多文化共生施策が今後の日本の将来のために重要な取り組みであることを理解する

内容のポイント
・日本政府の取り組みを理解するために海外諸国の取り組みと比較できるようにする ・日本の外国人登録者の状況をグラフで見て、数字からも理解を深めるようにする ・多文化共生に向けた取り組みは持続可能な社会構造のために必要不可欠な取り組みである ・自分の住んでいる町をなんとかしなければならないという意識啓発していく ・外国人が直面している課題を具体的に理解し、現状を把握する ・多文化共生における日本語教育の状況を客観的かつ大観的に考えることができる ・日本語教育が外国人の力を向上させ、これにより地域活性化につながることで理解できるようにする

受講者の気づき(例)
・少子高齢化などのため自分たちの町や市、国を守るためには外国人の力がすごく必要になる ・地域で日本語を教えたり、多文化共生の取組は外国人のみならず日本人や地域の未来に今後大きな力となる ・様々な場所で共に住んでいる人々や地域の生活をよくしていく取組が行われている ・現在、日本のおかれている現状が国の動きや各国のデータなどにより、よく理解できた ・魅力的な日本語教育の実践 ・多文化共生による地域の活性化 ・ボランティア歴は長いが「教えてあげている」意識がまだ根底にあった共生していくパートナーを育てるという意識にはなるほどなと思った ・日本語教師を育てる機関があまりにも少ない ・実習生、研修生などの日本語習得に事業主は理解していないのではないか ・多くの外国人が住んでいるのにも関わらず法律は整備されていない ・多文化共生を日本人に周知、理解させるにはどのようにしたらよいのか

事業運営ポイント
・講師は、海外諸国の状況についても知識が深く、具体的に理論づけられる人に依頼すること ・講師には、本講座の初回を担ってもらうことから、事業自体の目的と目標を明確に伝えておく ・受講者が「なるほど」と意欲的に動きだせるよう、講師に動機づけをしてもらえるようにする ・多文化共生施策は、日本の未来のために最もと取り組んでいかなければならないものだと受講者が気付けるよう、多文化共生について明るい人を講師に迎えるといい

振り返りシート

振り返りシート	
いつ	授業終了前10～15分
目標設定	講義内容をどこまで理解し、どこがまだ理解できていないかを文字化して、それを受講者間で共有する。また、これは講師への質問シート、フィードバックになる。

わかった！	まだ、わからない！
-------	-----------

A4の白紙を半分に折り、講義後の「わかった」「まだわからない」を記入する

例)

最終回に受講者に行った振り返り活動。4分割し、「今日のなるほど」「今日のわからない」「講座全体を振り返って発見したこと」「明日からの決意」を文字化した↓

今日の「なるほど！」

日本語教育という手段で
どうやって課題を解決するか
(日本語教育はあくまでも手段)

今日の「わからない」

研修全体をふりかえって「発見したこと」 明日から.....

- ・日本語を勉強して、何ができる
ようになるのか。(どうなるのか)を
明らかにする必要がある
- ・学習者と支援者の目標・目的
のギャップ(ミスマッチ)×

- ・何かを考えると、
~~課題~~ outcome →
Output → In ~~come~~ → In
comeの順番で Put
物事を考えます!!
- ・人とのつながり

事業運営ポイント

- ・講座担当者或いは講師より振り返りシート「わかった」「まだよくわからない」を配布する
- ・受講者に5分程度で記入してもらう
- ・記入には太めのカラーペンを使うと、黒板やホワイトボードに掲示したときに見やすくなる
- ・記入後、受講者同士ペアになって共有する、或いは発表して全員で共有するようにする
- ・「まだわからない」ところは講師がフォローすること

カリキュラム

○基本コース

1回3時間・計45時間

	月 日	講座名	講師
1 ※	9月29日	日本概論	田村 太郎 NPO法人多文化共生センター大阪代表理事
2	10月6日	移動する外国人	安里 和光 京都大学大学院特任教授
3	10月20日	地域の現状分析～見つめてみよう自分のまち～	堀 永乃 CRIATIVA代表・CLAIR多文化推進アドバイザー
4	10月27日	行政・企業・市民の取り組み	行政/企業CSR担当者
5	11月3日	コーディネーターの役割	神吉 宇一 財) 海外産業人材育成協会上席専門官
6	11月10日	外国人の声を聞く	外国人リーダー
7	11月17日	教室の目標と意義・企画立案	土井 佳彦 NPO法人多文化共生リソースセンター東海代表
8	11月24日	ニーズ分析・課題分析	川端 一博 公財) 日本国際教育支援協会作題主幹
9	12月1日	社会リソース・地域リソースを考える	堀 永乃 CRIATIVA代表・CLAIR多文化推進アドバイザー
10	12月8日	異文化理解	神吉 宇一 財) 海外産業人材育成協会上席専門官
11	12月15日	ボランティアマネジメント論	田村 太郎 NPO法人多文化共生センター大阪代表理事
12	12月22日	地域を巻き込む活動を考えよう	パネルディスカッション
13	1月12日	ファシリテーションを学ぶ	土井 佳彦 NPO法人多文化共生リソースセンター東海代表
14	1月19日	プレゼンテーションをしてみよう	神吉 宇一 財) 海外産業人材育成協会上席専門官
15	1月26日	先輩社会起業家に学べ！ 今こそ社会の課題を解決しよう	先輩社会起業家

※「日本概論」は4時間

○プログラムコーディネーターコース

1回2時間・計8時間

1	2月2日 10:00～12:00	教案を作る～何ができるようになるのか～	嶋田 和子 一般社団法人アクラス日本語研究所代表理事
2	2月2日 13:30～15:30	教材分析・教材を作る	嶋田 和子 一般社団法人アクラス日本語研究所代表理事
3	2月16日 13:30～15:30	日本語能力の評価	川端 一博 公財) 日本国際教育支援協会作題主幹
4	2月23日 13:00～17:00※	事業目標と事業評価	田村 太郎 NPO法人多文化共生センター大阪代表理事

○システムコーディネーターコース

1回2時間・計8時間

1	2月9日 10:00～12:00	教室設置を考える	林 光洋 駒ヶ根市
2	2月9日 13:30～15:30	チラシを作る	堀 永乃 CRIATIVA代表・CLAIR多文化推進アドバイザー
3	2月16日 10:00～12:00	収支予算計画を立てる	NPO担当税理士 東海浜松会計事務所
4	2月23日 13:00～17:00※	事業目標と事業評価	田村 太郎 NPO法人多文化共生センター大阪代表理事

※最終回につき、合同クラスで計4時間

構 成

<内容>

第〇回	
テーマ	講座のテーマ
目標設定	本講座の目標値です
内容のポイント	
講座内容のポイントです。ここでは、受講者の気付きと学びが得られる重要点を記載しています。	
受講者の気づき(例)	
浜松の実践にて、受講者から出てきたコメントを原文のまま記載しています。	
事業運営ポイント	
講座主催者が気をつけなければならないポイントを記載しています。効果的に事業を進めるためには、まずこのポイントを読んでから講座の準備にあたってください。	

<流れ>

